

- 26 古都家1号墳調査団「美和古墳群」『ひすい』85～100 佐々木古代文化研究会 1961
- 27 亀井正道「祭祀遺跡—製塩に関連して—」『新版考古学講座』8 1971
- 28 森浩一・宮川渉『カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第1冊 古代学研究会 1953
- 29 森岡秀人「銅鏡」『季刊考古学』第27号 雄山閣 1989
- 30 奈良国立文化財研究所「佐紀池の調査」『昭和51年度平城京跡発掘調査部発掘調査概報』 1977
- 31 関川尚功他「曽我遺跡」『奈良県遺跡調査概報第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所 1983
- 32 外岡龍二「伊豆の祭祀遺跡」『駿豆考古』第20・21合併号 1978
- 33 財静岡県埋蔵文化財調査研究所『大谷川』Ⅱ（遺溝編） 1987
- 34 梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立(2)」『群馬県史研究』第3号 群馬県史編さん委員会 1976

3 大日塚古墳出土土器について

今回の調査において、墳丘下及び古墳周辺から4軒の竪穴式住居跡を確認できた。調査対象が古墳であったため、墳丘下及び周辺にあるであろう集落跡の全体像を掴むには至らなかったが、古墳築造とかなり近接した時期のものであるという点、また、土器構成の中に他地方の弥生土器の系譜を引くものを含むという点で考えるべきことは多い。前者に関していうならば、近接する愛宕塚古墳と違って、確実にこの古墳に伴うであろう土器がはっきりしないことから、この古墳の年代を考える場合、墳丘下住居跡の年代を上限とし、それを遡ることはないという言い方が一番事実 に即している。つまり、この墳丘下の住居跡の年代を考えることが、この古墳の年代を考えることに繋がることになる。また、後者の土器構成を考えることは、その古墳を造ったであろう生産母体の系譜を考えることにも繋がる。このような問題を念頭に置きながら、住居跡出土土器について述べてみる。

(1) 住居跡出土土器について

4軒の竪穴住居のうち3号住の土器内容についてはほとんどわからないため、残りの3軒についてその時間的位置づけを試みたい。

まず、3軒の住居跡の先後関係について検討した後で、時間的位置づけをしてみたい。

甕は、S字甕、単口辺台付甕、平底甕に分けられる。

S字甕——4号住からの出土はないが、1号住、2号住で出土している。共通して存在するのは台部のみで、1号住の5も2号住の4～7両方とも端部に折り返しをもつもので同様のタイプである。口辺部は2号住からだけの出土である。S字甕については、多くの分類、編年案が示されているので、ここで少し述べてみる。1は、赤塚分類^{註1}のB類、小森分類^{註2}のⅡ類にあたり、2は赤塚分類のC類、小森分類のⅢ類にあたる。赤塚分類は、S字甕の本場である濃尾平野を取り扱っており、小森分類は、本県のS字甕を取り扱ったものである。赤塚氏は、「S字甕はB類にいたり広く東国・畿内へ拡散する」「S字甕の移動には定着型の傾向が見られ、特定集団の移動

を含めて人々の漂泊性がその底流に認められる。」と指摘していることは注目される。^{註3}また、2号住においてB類とC類が共伴するわけであるが、これに関しては、小森が本県谷近台遺跡の例を取り上げ、「^{註3}時期的に一時期併行する可能性がある」とし「土器が古相のものから新相のものへ一時期重複」した段階としている。

また、3もS字甕の範疇に入ると考えられる。その口辺形状は受け口状を呈す。埼玉県神川村前組羽倉遺跡第2号住居跡出土のものも同様の受け口状を呈す。利根川氏は、この報告の中でこれを「近江系受け口状口縁の影響下にあり」と説明している。^{註4}ただ、3は器面仕上げがS字甕と同様であることから、ここではS字甕の範疇でとらえておきたい。付言すれば、前組羽倉遺跡第2号住居跡からは、本跡同様樽式土器が出土している。因みに、利根川氏はこの住居跡を五領式土器の範疇に入るものの弥生時代～古墳時代にかけて移行期の所産としてとらえている。

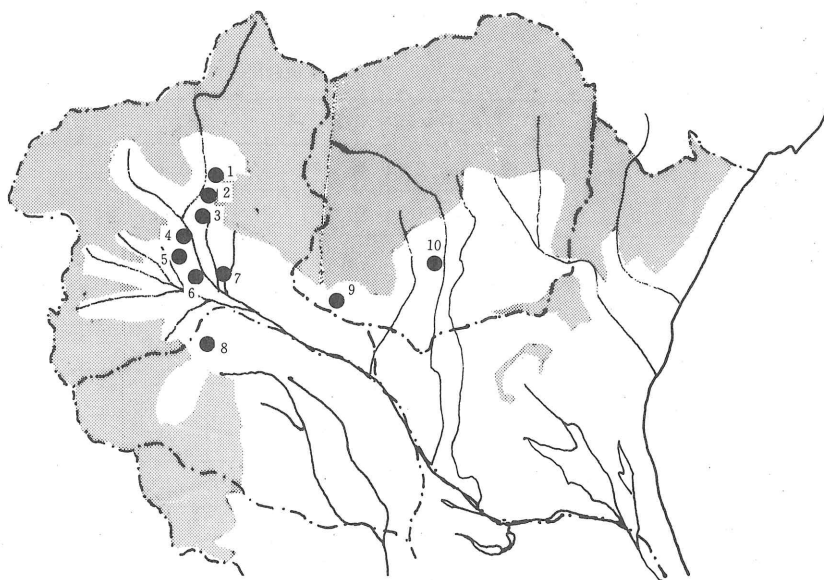
単口辺台付甕——1号住2、4と2号住8、9、15と4号住2が挙げられる。全体的器形がわかるものがないため何とも言えないが、口辺部を比較してみると、1号住の2も2号住の8、9とも仕上げが、内外面ハケ後ヨコナデをしている点、台部はいずれも断面形が内湾するタイプである点、共通する要素が多い。

平底甕——1号住の1と2号住の10～14が挙げられる。12は全体的な器形がわからないが、底部から胴部にかけて直線的に延び、胴部上半に最大径をもつと思われる。本県においては、大平町伯仲遺跡 SI-06、SK-13に類例が求められる。SI-06出土のものは、口辺部～胴部上半にかけて単節斜縄文を三段に施文した土器である。報告にあたった藤田氏によれば、「タテハケの存在・縄文施文部位が上半までしか及ばない」などの点を挙げ、「赤井戸の色彩をより強く残しながら土師の様相をもった土器」として紹介されている。^{註5}所謂、県内において移行期の土器として取り挙げられているものである。13は底部に木葉痕を一部残しあとはナデ消している。10、11は樽式系土器の範疇に入る土器として捉えられる。樽式土器は相京・三宅両氏によってⅣ期に分けられているが、本跡出土のものは、そのうち樽Ⅳ期にあたると考えられる。すなわち、Ⅳ期の指標として、甕の文様は口辺部上半波状文、口辺部下半波状文で、頸部2連～多連止め簾状文、胴部は波状文を数段施文するかあるいは無文である。^{註6}ちなみにこれは、榛名東南麓地域の特徴である。本跡出土のものは、口辺部に2段の波状文、頸部3連止め簾状文、胴部は無文である。この他にも、本跡の14は色調が黒光りするような赤褐色で、磨きも入念になされている点、その系統のものと思われる。また、盛土内出土土器のものも波状文こそ施さないが樽式系の壺の折り返し口辺部と考えられる。現在、県内における樽式土器の出土例は本跡を入れて9か所確認され、その分布範囲は本跡を含む茂原地域と樽式土器の本場である群馬県に近い足利地方に集中している。

これに対し、1号住の1は、器形の点から言えばやはり伯仲遺跡の SI-10出土土器に近く、弥生的である。ここで注目すべき点は、在地の弥生時代後期の二軒屋式土器のプロポーションをとらずに、群馬県の樽式或いは赤井戸式のプロポーションをとる点である。次に、仕上げ法では、胴部下半のヘラ削りは樽Ⅳ期、赤井戸Ⅲ期の段階にみられるが、口辺部～胴部中位にかけての櫛

状工具(2～3条)による仕上げは、いまのところ類例を見ない。また、内面は胴部上半～口辺部の一部にかけてヘラ磨きが施されている。外面粗い作りのわりに内面に磨きを施す点注目しておきたい。

ここまで甕について述べてきたところで、S字甕と樽式土器の共伴関係について少し詳しく検討してみたい。



第131図 S字・樽共伴遺跡分布図

No	遺 跡 名	所 在 地	備 考	文献
1	舩海戸遺跡	群馬県利根川場村大字門前	住居跡3軒	註9
2	高野原遺跡	〃 利根川場村・沼田市	住居跡12軒	註9
3	糸井宮前遺跡	〃 利根郡昭和村大字糸井	住居跡35軒(古墳前期)	註10
4	有馬遺跡	〃 渋川市	住居跡, 磯床墓	註8
5	熊野堂遺跡	〃 高崎市大八木町字熊野堂	住居跡(弥3, 古前期1)	註7
6	新保遺跡	〃 高崎市新保町	住居跡, 周溝墓	註32
7	堤東遺跡	〃 前橋市荒子町堤東	周溝墓(前方後方形含)3	註33
8	前組羽倉遺跡	埼玉県児玉郡神川村新里字前組	住居跡3軒, 周溝墓6基	註4
9	菅田西根遺跡	栃木県足利市菅田町字西根	住居跡9軒, 周溝墓7基	註34
10	大日塚墳丘下	〃 宇都宮市茂原町	住居跡4軒	本書

第22表 S字・樽共伴遺跡一覧

現在までのところ2号住居跡のように、S字甕と樽式土器が1遺跡内で共伴する例は第22表に示すとおり10例を数える。この中で2号住居跡と同様に一住居跡内で共伴している例は、群馬県内において3例ある。

その中で熊野堂8号住例が一番早い時期のものである。本跡は南北に長軸をもつ隅丸長方形の住居跡で、報告書では弥生時代の中で取り扱われている。ここでは、樽系の甕とS字甕の口辺部破片が共伴している。S字甕は口辺部に刺突文をもち、頸部外面に平行横線文を施しているもので、飯塚卓二氏は「大参義一氏の分類によるA類」としている。^{註7}

浅間C降下

畿内	都 出 編 年	庄 内 古	庄 内 新	布 留 古	
	石 野 編 年	纏 向 1	纏 向 2	纏 向 3	纏 向 4
愛知	加 納 編 年	欠 山 新	元 屋 敷 古	元 屋 敷 中	
千葉		I	II	III	IV
栃木		弥 生	III	IV	V
群馬	橋本・田口編年		I	II	III
	相京・三宅編年		樽 IV		
	小 島 編 年		赤 井 戸 II	赤 井 戸 III	
	田口(S字)編年		I	II	III
遺 跡 名	新 保 遺 跡	158号住 (樽)	141号住 (SⅡ-b)		
	堤 東 遺 跡			1号周溝墓→2号周溝墓 (樽) (SⅢ)	
	糸井宮前遺跡				1期→2期 (樽・SⅢ-b, IV-b, c)
	有 馬 遺 跡		82号住 (樽・SⅡ-b)		
	熊 野 堂 遺 跡		8号住 (樽・SⅠ)	9号住 (パレス壺)	
	高 野 原 遺 跡		6号住 (樽)	5号住 (S?)	
	舩 海 戸 遺 跡				2号住 (樽・SⅡ-b?)
	前組羽倉遺跡	1号住→3号住 (樽)	2号住 (樽)		6号住溝墓 (SⅡ-b?)
	菅田西根遺跡		1号住 (樽)	3号住 (SⅢ-a)	
	大日塚古墳墳丘下			2号住 (樽・SⅡ-b, Ⅲ-a)	

第23表 S字・樽共伴遺跡関係表

これよりも後出した例として、有馬遺跡82号住が挙げられる。ここでは、S字甕と樽式の高坏が共伴している。S字甕は田口分類のⅡ類にあたる。この他に北陸系月影式の甕が共伴していることから畿内との平行関係が考えられ、この住居跡は庄内に比定されるだろうとのことである。また、友廣哲也氏は、土層断面図から「C軽石が示すものは少なくとも有馬遺跡では樽式土器が古式土師器へと変化した以後にC軽石が降下したのである」とし、さらに「C軽石の降下は少なくとも4世紀初頭を下ることはない。」と付け加えている。^{註8}

さらに、後出した段階の例としては舩海戸遺跡2号住が挙げられる。ここではS字甕樽式の甕が共伴している。S字甕は田口分類のⅣ類にあたる。^{註9}

これらの他に、直接の共伴関係はないが、一集落内において同一時期にS字甕と樽式土器を使用した例として、糸井宮前遺跡が挙げられる。報告書によれば、本集落は住居跡の構造から2時期に分けられている。その両時期にまたがってS字甕をもつ住居跡と樽式土器をもつ住居跡とが併存する。関根慎二氏は、S字甕は田口分類のⅢ-b, Ⅳ-b, c類にあたり、「それぞれ田口氏のⅣ期、Ⅴ期に相当し、赤井戸式土器のⅢ期に矛盾しない。」と述べている。^{註10}ちなみに、同一住居跡内でS字甕と樽式土器の共伴がみられない代わりに、赤井戸式土器と共伴関係がみられる点は注目すべき点である。

新保遺跡、高野原遺跡、堤東遺跡、前組羽倉遺跡、菅田西根遺跡の5例は、同一遺跡内での樽式土器とS字甕がみられる例である。若干の時間差はあるが、各遺跡とも樽式土器が終焉しS字甕が使用されるようになる。

以上、大日塚古墳墳丘下2号住居跡のように、S字甕と樽式土器が共伴する例は現在のところ群馬県の3例だけである。ただし、本跡のように樽式土器とS字甕のⅡ・Ⅲ類が共伴する例は今のところない。ただ、考えられることは、群馬県特に高崎市周辺において、熊野堂遺跡8号住の段階にはすでにS字甕を持った外来集団と樽式土器を使用していた在地集団が何らかの形（平和的か征服的か）で接触し始めた。そして少なくとも今のところ、糸井宮前遺跡の段階までこれが続く。この影響がその期間内に本跡を含む茂原周辺に及ぼされる。それがどのような形のものであったかは推測の域を出るものでない。但し、間違いなく人の動きはあり、それも今まで言われてきた「東海道ルート」でなく、藤田氏などが指摘するように「群馬方面」からのものである。^{註11}

壺——1号住の3, 6~8と2号住の17~21が挙げられる。これらはそれぞれ大型、小型品に分けられる。大型品は1号住の3と6が球形の胴部で仕上げが粗いのに対し、2号住の17~20と入念なヘラ磨きが施され、17, 18は同一個体と考えられ胴部下半に明瞭な稜をもち、また19は口縁が内湾する広口壺で、20がやはり口辺が内湾気味に立ち上がり口縁部に面取りをもつヒサゴ壺と、この壺類に関しては東海系の色彩が濃い。小型品は1号住の7, 8胴部下半に明瞭な稜を有する点2号住の大型品と同様で、2号住は20の小型品であるヒサゴ壺が出土している。

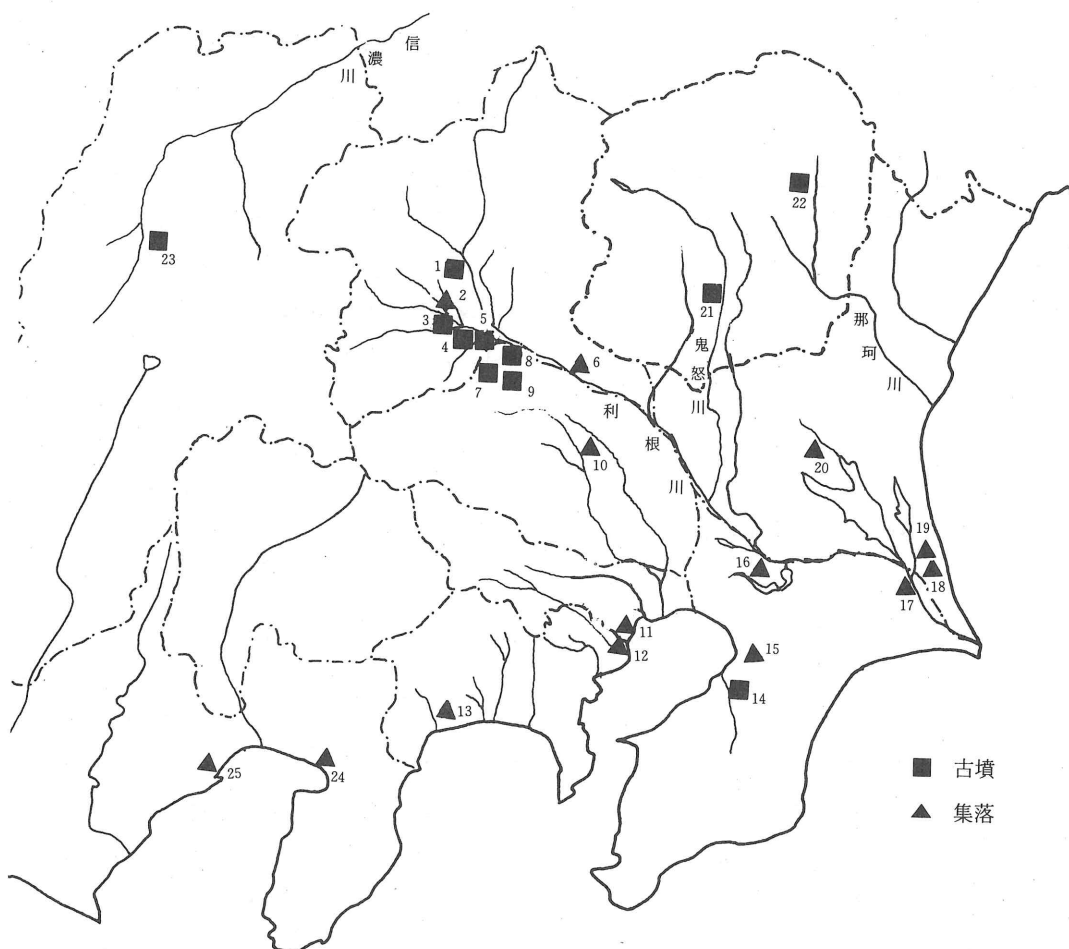
器台——1号住の9と2号住の22と2号住の1が挙げられる。いずれも小型で受皿部に稜をもたないタイプであるが、2号住の22は受皿部中央に貫通孔をもたない。

この他の器種として2号住に高坏が出土している。脚部のみであるが、裾が大きく広がるタイプである。県内では、駒形大塚古墳^{註12}、烏森遺跡^{註13}などの類例を見いだせる。

以上、3軒を比較してきた。4号住に関しては土器が2点しかでていないので比較対象とするには資料的に不十分であったが、ここにあげておいた3軒についてほぼ同時期の所産と考えておきたい。特に1号住と2号住の2軒に関しては、その器種構成において、両者とも櫛描文文化圏の中でも樽式土器文化圏の影響を残しつつ、その中に新しい時代の潮流として外来系（特に東海西部系）が共伴している事実が挙げられる。このことから考えると両跡はほとんど同時期のものと考えられ、しかも、弥生～古墳時代への移行期（昭和56年シンポジウムにおける3期^{註14}）のものと考えることができる。

(2) 古墳出土土器について

第4章でも述べたように、古墳からは多数の破片が出土しているが、確実に古墳に伴うと考え



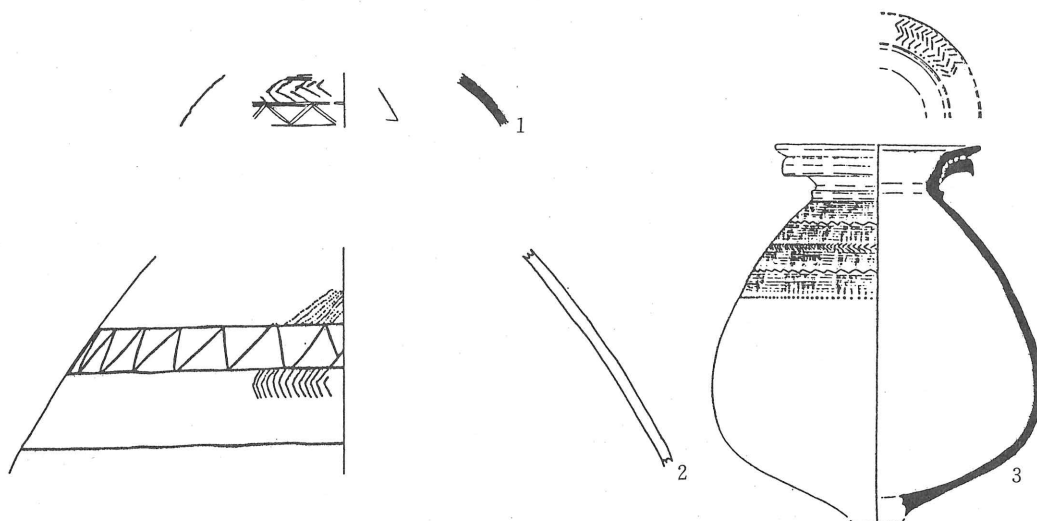
第132図 「壺E類」分布図

No	遺 跡 名	所 在 地	遺跡の種類	口辺 形態	突 帯	胴 部 文 様 構 成	赤 彩	田口 分類	備 考	文献
1	中 村 遺 跡	◇ 渋川市	円形周溝墓	I	○	A-b-A-b-C	○	A II		註20
2	熊 野 堂 遺 跡	◇ 高崎市	集落	?	?	A-B-A-B-A-B	○	A I	(9号住)	註7
3	貝 沢 柳 町 遺 跡	群馬県高崎市貝沢町	方形周溝墓	I	○	B-A-B-A-B-A-C	○	A II	(1号墓)	註21
				II	○	B-A-B-A-B-A-C	○	B	(◇)	
				II	○	A-E-a-b-a-b	○	B	(2号墓)	
4	元島名將軍塚古墳	◇ 高崎市元島名	前方後方墳	?	?	A-b-A-b-A-b-A-C	×	A III		註22
5	箱石浅間山古墳	◇ 玉村町	方墳	II	?	?-A-b-A-b-A-?	○	C		註23
6	御 正 作 遺 跡	◇ 邑楽郡大泉町	集落	I	×	A-b-A-b-A	○	C	(4号住)	註17
				?	?	A-D-A-b-A			(No2区)	
7	生 野 山 古 墳 群	◇ ◇ ◇	方形周溝墓	?	○	B-A-B-?			S字共伴	註24
8	村 後 遺 跡	◇	方形周溝墓	II	●	A-b-b	○	C	(1号墓)	註25
9	南 志 渡 川 遺 跡	埼玉県児玉郡児玉町	方形周溝墓	II	×	A-B-A-C		B I	(5号墓)	註16
				I	×	A-B-A-B-A-B-A-B-A-C		B I	(4号墓)	
				I	×	A-B-A-B-A	○	A I		
				II	×	A-B-A-A-A-C	○	A II	(1号墓)	
10	下 閭 遺 跡	◇ 鴻巣市滝馬室	集落	I	○	A-B-A-B-A-C	○	A I	(5号住)	註26
11	山 王 遺 跡	東京都大田区山王	集落	?	?	A-B-A-B-A				註16
12	久 ケ 原 遺 跡	◇	集落	I	×	A-B-A-B				註16
13	千 代 遺 跡	神奈川県小田原市千代	集落	?	×	A-B-A-B-A-B	○			註16
14	長 平 台 遺 跡	千葉県市原市総社	方墳	I	○	C-A-B-A-B-A-C	○	C	(289号墓)	註27
				I	○	A-B-?	○	A I	(288号墓)	
15	東寺山石神遺跡	◇	集落	?	?	a-b-b-A	×	C		註28
16	舟尾町田遺跡	◇	集落	II	○	C-B-A-B-A-B-A-C	○	B II	(Hグリッド)	註29
17	阿玉台北遺跡	◇	集落	?	?	E-A-B-E-C	○	C	(021号住)	註30
18	ふ た ご 塚 遺 跡	茨城県鹿島郡鹿島町	集落	I	×	A-B-A-B-A-C		A II		註16
19	木 滝 台 遺 跡	◇ ◇ ◇	集落	I	○	A-B-A-B-A		A II		註16
20	松 延 遺 跡		集落	I	×	C-b-C		C		註16
21	大 日 塚 古 墳	栃木県宇都宮市茂原町	前方後方墳	?	?	A-b-A-D-b-A	○	C		
22	下 侍 塚 古 墳	◇ 湯津上村	前方後方墳	?	?	b-A-?	○			註31
23	弘 法 山 古 墳	長野県松本市出川	前方後方墳	II	○	A-B-A-B-A-C	○			註15
24	御 幸 町 遺 跡	静岡県沼津市御幸町	集落				×			註15
25	下 野 遺 跡	◇ 清水市下野	旧河道	?	?	C-a-b-a-D-b				註18

(註)

- 口辺形態については、次のような簡単な分類をした。I 口辺部外面は厚く、ほぼ垂直な面をもつ。II 有段口辺（いわゆる二重口辺）。? 口辺部欠落のもの
- 突帯が有るものは○、無いものは×、わからないものは? とした。●は突帯に刻目のあるもの。
- 胴部の文様については、次のように記号で表した。A 平行線文、a 一条の横線文、B 山形文（櫛状工具による）、b 山形文（ヘラ描きによる）、C 刺突文、D 綾杉文、E 波状文
- 赤彩は部分的にでも施されてあるものは○、まったく無いものが×とした。
- 田口分類は、田口氏が、「パレス・スタイル壺の末裔たち」の中で分類したものをそのまま引用した。

第24表 胴部文様に山形文をもつ東海系壺一覧



第133図 胴部に山形文と綾杉文をもつ壺
(1, 御正作遺跡 2, 下野遺跡 3, 勸学院遺跡)

られる土器は少ない。第55図に示した中のAランクとしたものがそれである。但し、墳丘下に集落跡があったこと、またトレンチ調査であることから問題が複雑になるわけである。そのため、ここで土器の検討が直接古墳の年代に結びつくかは問題である。あくまでも前述したように、墳丘下の住居跡の年代を上限とし、それを遡ることがないという言い方が一番事実在即しているわけであり、1での検討でその上限も考えてみた。

そこで、あくまでも可能性の追求ということになってしまうわけであるが、Aランクの土器、特に東海系壺を検討することによって、さらに古墳の年代を考える上での補強材としたい。

Aランクに挙げた土器には、東海系壺、小型高坏、埴が挙げられる。

その中の東海系壺について見てみる。東海系壺にも本古墳においては2種類ある。1つは文様に円弧文を持つもので埼玉県五領遺跡にその例を見ることができる。もう一方は文様に山形文をもつもので、^{註15}浅井和宏氏の言う「パレススタイル壺E類」に属し、その類例も多い。この種の壺に関する検討は田口氏が詳しく行なっている^{註16}ので、それを参考に考えてみる。第24表に示したようにこの範疇に入るものは関東地方において今のところ22例である。大日塚古墳のように墳墓例は10例あり、前方後方墳も3例ある。これらは第132図からもわかるように北関東特に西部に集中する。田口氏は、この墳墓出土例について「濃尾平野から、それぞれの地に定着し、そして死んでいった人々に対してその集団の象徴である装飾壺が鎮魂の器として使われたと考える」と述べている。^{註16}また、田口氏は関東におけるこの種の壺の分類、編年を行なっている。そこで、烏川・井野川地域においては、熊野堂9号住(壺A-I類)段階、S字甕編年I~II期段階に出現し、S字甕V期の段階にその終焉を迎えるとしている。そして大日塚古墳のようなC形式はA-III類とほぼ同じ時期であるとしている。

大日塚古墳例は胴部形態が下膨れ気味で古い様相を残す。赤色塗彩に関しては、山形文部分にのみ胴部下半に施していない点原則から外れている。胴部文様形態においても、平行線文と山形文の間に綾杉文を施している点は「E類」の範疇から外れる。このような例は群馬県御正作遺跡^{註17}、静岡県下野遺跡^{註18}、滋賀県歓学院遺跡^{註19}の3例がある（第133図参照）。御正作遺跡と下野遺跡例は山形文と平行線文の間に櫛状工具の刺突による綾杉文をもつという点で大日塚古墳例と共通するが、両者とも平行線文部分がヘラ描きによる1条の横線文であり、大日塚古墳例と異なる。これに対し、歓学院遺跡 SX 5 出土のものは胴部文様帯に関しては近似しているが、器形の点で違いを見せる。ちなみに歓学院遺跡は、滋賀県近江八幡市に所在し方墳と考えられているもので、共伴遺物に甕、高坏、手あぶり型土器が出土している。

住居跡出土土器の検討から、北関東西部地方との関連が考えられたわけであるが、東海西部系壺の分布状況からみても、北関東西部地方との関連が考えられそうである。これらのことから考えると、当茂原地域への土師器の波及は、北関東西部地方(特に高崎市周辺地域)との交流の中で行なわれたと思われる。時期的には、田口氏が烏川・井野川流域で検討しているS字甕Ⅱ～Ⅲ期以降に「パレス壺」Ⅲ期という図式が、2号住→大日塚古墳という流れにもあてはまる。

(註)

- 1 赤塚次郎「“S字甕” 覚書 '85」『愛知県埋蔵文化財センター年報』
- 2 小森紀男「古墳出現期における外来系土器の検討ー栃木県内出土例を中心としてー」『栃木県考古学会誌』第10集 栃木県考古学会 1988
- 3 赤塚次郎「逍遙する土器」『欠山式とその前後 研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 1987
- 4 書上元博、柿沼幹夫、駒宮史朗、坂本和俊、関義則、利根川章彦「神川村前組羽倉遺跡研究」『埼玉県立博物館紀要』-12 1985
- 5 藤田典夫ほか『伯仲遺跡』栃木県教育委員会 1984
- 6 三宅敦気、相京健史「樽式土器の分類ー榛名山東南麓を中心としてー」『弥生終末期の土器 四世紀の土器』第3回三県弥生時代シンポジウム群馬県資料 1982
- 7 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』 1984
- 8 友廣哲也「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」『群馬の考古学』 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕 1988
- 9 群馬県教育委員会、〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕『門前橋詰・外海戸遺跡・高野遺跡』-〔群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第83集公共開発関連出土品等整理報告書 1989
- 10 群馬県教育委員会、〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕『糸井宮前遺跡Ⅰ』 1985
- 11 藤田典夫「栃木県市貝町下椎谷の古式土師器」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会 1989
- 12 三木文雄『那須駒形大塚』小川町教育委員会 1986
- 13 田代隆ほか『烏森遺跡』〔栃木県文化振興事業団 1986

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

- 14 日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウムⅡ「関東における古墳出現期の諸問題」 資料 1981
- 15 浅井和宏「＜宮廷式土器＞について」『欠山式とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- 16 田口一郎「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式とその前後 研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 1987
- 17 車崎正彦ほか『御正作遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』大泉町教育委員会 1984
- 18 建設省中部地方建設局, 静岡県教育委員会, 清水市教育委員会『下野遺跡』 1985
- 19 埋蔵文化財研究会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅲ分冊一近畿編一第25回埋蔵文化財研究集会 1989
- 20 五十嵐信ほか『中村遺跡』渋川市教育委員会ほか 1986
- 21 久保泰博ほか『貝沢柳町遺跡』高崎市教育委員会 1986
- 22 田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981
- 23 平野進一「箱石浅間古墳」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所ほか 1984
- 24 山川守男「上武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所ほか 1984
- 25 細田勝ほか『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財事業団 1981
- 26 山崎武ほか『下閭遺跡』鴻巣市遺跡調査会 1981
- 27 白井久美子ほか「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会 1982
- 28 沼沢豊ほか『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977
- 29 田坂浩ほか「舟尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター 1984
- 30 矢戸三男ほか『阿玉台北遺跡』房総考古学資料刊行会 1975
- 31 大金宣亮ほか『下侍塚周濠発掘調査概報』湯津上村教育委員会 1976
- 32 群馬県教育委員会, 財群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅱ一関越自動車(新潟線)埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』1988
- 33 群馬県教育委員会『堤東遺跡』1985
- 34 足利市遺跡調査団, 足利市教育委員会『菅田西根遺跡』1987